

# 大分県を襲った未曾有の大風水害

1893(明治26)年10月の風水害は、江戸時代から現在までの数百年間で未曾有のもので、大分県全域に災害史上類を見ない惨禍をもたらした。この災害については清原道彦氏(当時、大分県属)の詳しい調査<sup>1)、2)</sup>がある。これらに基づいて、災害の概要を述べる。

10月12日は陰雲低く垂れ時々微雨が降り、天候何となく異状を呈せり。

13日午前1時ごろから強雨となり、風も加わり次第に強さを増し、午後4時に風雨猛烈となり大小河川は増水の兆あり。

14日午前3時に至り、烈風地を巻き、豪雨盆を覆し、百川たちまち決壊して滔天撼地(激しく地を揺るがす)の勢いを呈し、瞬間にして幾多の生命財産を掃蕩しこれを烏有に帰せり。

14日、出水の時間は各地多少の差異があるが早きは未明、遅きは午前7時ころから。その膨張(水位上昇)が猛烈なりしたため、わずか数時間で県内の橋梁はほとんど流失し、道路もひとつとして旧形を存せるものはなし。

沿海各地は海嘯(高潮)のため、西福岡県境から東宮崎県境に至る百数十里の間は築港堤防田園など概ね破壊流失し、旧観を保する者甚だ稀なり。

県内の被害の概略は死者280人、負傷者97人、死畜209頭、家屋の流失・倒壊6,044棟、浸水家屋15,334棟、被害田畑宅地塩田等4,900町余。

このような惨害をもたらしたのは台風であった。

ルソン島東方海上から北上してきた低気圧は、10月13日沖縄の東を経て14日早朝、鹿児島県佐多岬付近に達した。その後暴風雨の中心は宮崎市付近を通過し、14日午後2時豊後水道の南を経て東に向きを転じ、15日は四国沖を進んだ。中心の最低気圧は970.6hPaであった。(台風は当時、低気圧または暴風雨と呼ばれ、明治の末になって“台風”と名付けられた。)(中央気象台年報明治26年)。

大分地方では、13日午後1時から14日正午まで

のまる1日間北東の風が吹き、特に14日午前0時から正午までは平均風速10m/s以上の強風が吹き続け、台風が最接近した14日午前10時ごろには最大風速北東の風18.6m/sであった(10月としては明治26年観測開始以来3位)。

雨は14日午前3時ごろから午前9時までは1時間15~26mmのどしゃ降りの雨が続いた。14日の日雨量は327.9mmとなった(全年を通じ史上3位)。

大分県では、台風が豊後水道を北進または四国西部を北上するとき水害に対してもっとも警戒を要する<sup>3)</sup>。

水害の惨状は、文献1)に図版とともに詳細な記録が残されている。以下はその一部である。

大分町(現大分市)八県庁所在地ニシテ全街八変ジテ一面ノ湖海トナリ、深キ八人頭ヲ没シ、各家ニ在テ八床上5、6尺乃至12尺、剩ス所八県庁、裁判所、寺院等高所ニ在ル3、4ノ建物ニ過ギズ……(スケッチ1)

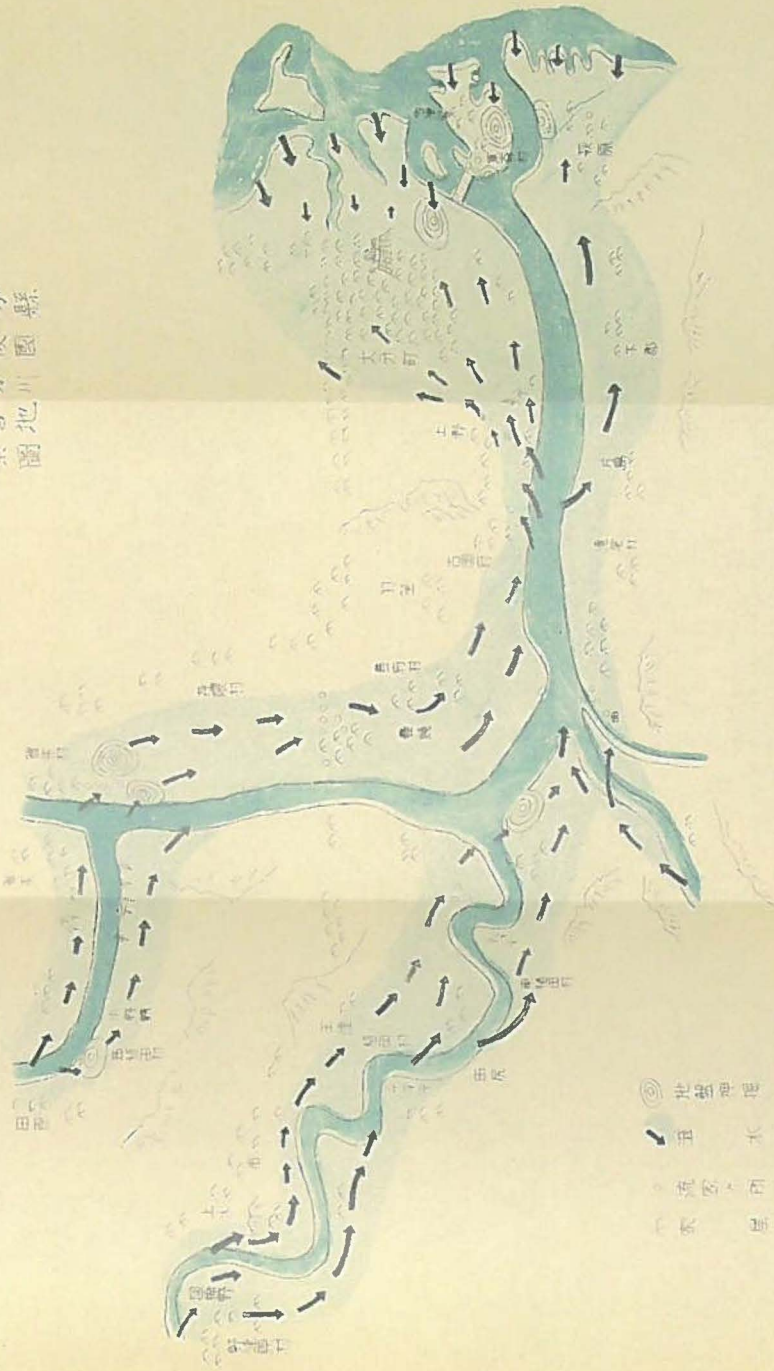
高田村(大分市):鶴瀬ノ大堤防決壊シ家屋ノ一斉ニ流失セルモノ30余戸、居住者ノ多ク八溺流シ、家屋流失ノ跡ハ一大磧地トナリ、四野凄愴トシテ鷄犬ノ声ナク渺々タル磧上ニ悄然佇立スル老嫗アリ、潜然涕泣スル小婦アリ、マタ高呼喚叫以テ母ヲ追ウノ児女アリ、或ハ死体ヲ搜索物色スルノ壮丁アリ、嗚呼世間何物カ之ニ比スルノ惨害アラシヤ……(スケッチ2)

戸次村:高田村ノ上流ニアリ、一家8人家屋ト共ニ流失シ或ハ9人ノ家族中8人溺没シ、少女ガ流材堆積ノ間ニ圧セラレ却テ死ヲ免レタルアリ、マタ終日蛇蝎ト共ニ樹上ニ在テ漸ク一生を得タルアリ、其悲惨ノ状謂ウベカラズ……(スケッチ3)

[参考文献]

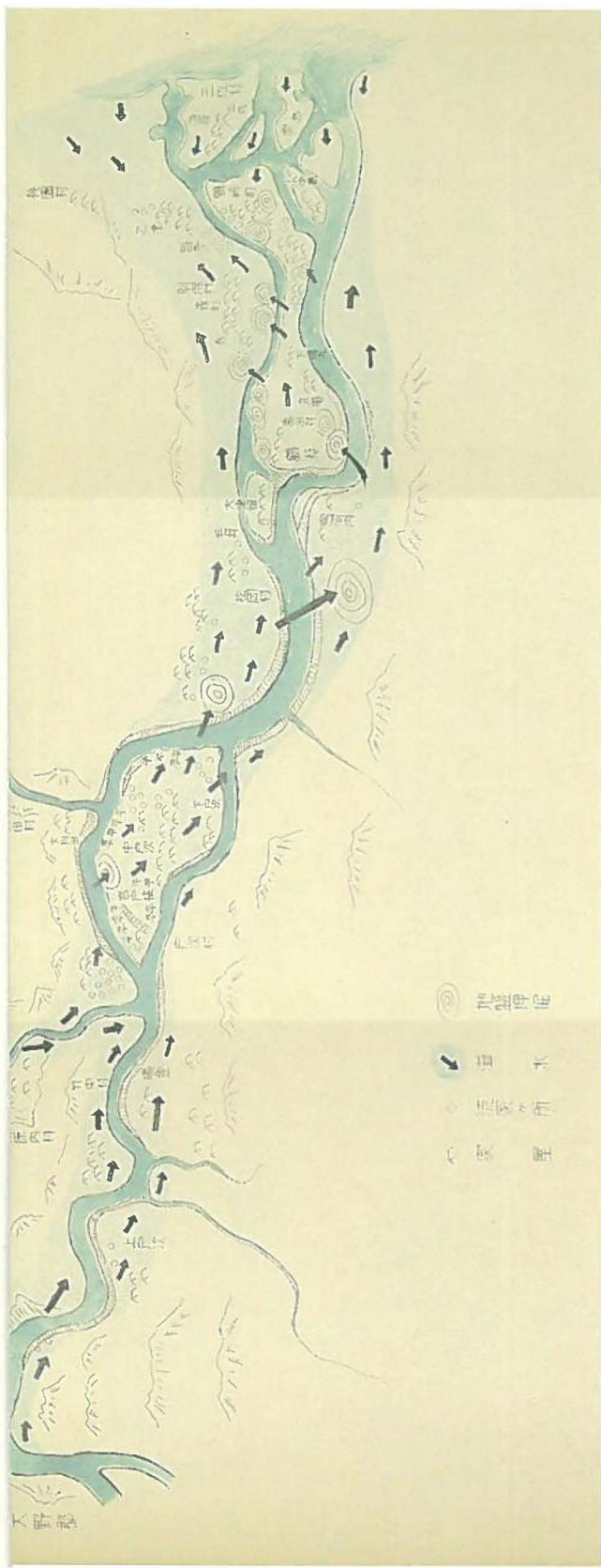
- 1) 清原道彦編:明治26年10月17日大分県水害史全、明治29年(大分県立図書館蔵)
  - 2) 大分県総務部編:大分県史(近代篇)、1981
  - 3) 大分測候所:大分県災害誌(調査編)、1952
- 宮澤 清治(元神戸海洋気象台長/元本誌編集委員)

大分縣  
豐後國  
大分川  
水害地  
實景圖



大分縣  
豐後國  
大野川  
水害地  
實景圖





大分県水害地実景図（気象庁蔵「大分県災害誌（調査編）」より。同誌には大分川、大野川のほかに 山国川、 駅館川の計 4 枚の実景図が掲載されている）



スケッチ 1



スケッチ 2



スケッチ 3

大分県水害被害状況スケッチ（神戸海洋気象台蔵、ここに掲載したものを合わせてスケッチは 10 枚ある）